

を以ちて語りて、白しく、に、この歌謡の「語りもの」からの直接採録を推測、そこに「建内宿禰そのものが、「語りもの」の中で形成されて来た人物で……『記紀』中のその人に関する事蹟の多くは」そうした出自を持つか、といわれ（古事記72、74歌〔評〕一六九頁）、また「日本書紀二八歌」を中心に、一度失われた「武内宿禰物語」とその中の歌謡が別の「武内宿禰物語」に組み込まれていった経路を推論している（書紀二八歌〔評〕三〇五頁）。いまそれらについて詳しく述べる余裕はないが、記紀歌謡に定着するまでの、それは一種の謎解きにも似てはなはだ暗示に富むものである。

歌謡の形式についての分析と比較研究にしても、これだけの緻密な論及は特筆に価しよう。

以上の事項の何れをみても、すべて『記紀』研究の上で大きな比重を占める検討課題であることがわかるであろう。著者は慎重の上にも慎重な目配りを考えの及ぶ限りに尽くし、従来おおよそ定説のごとく見られている事態に対しても、容謝なく追究の筆をゆるめない。

個々の評釈を各論とすれば、「はじめに」は総論にあたる。それは著者の『記紀』の成立論を含む総合的な見地における「記紀歌謡論」で、いわば著者の現段階での到達点でもあり、解釈におわるといったその一典型をここに見出すのである。まずこの「はじめに」のところで、いきなり読者は本論の渦中に投げこまれた印象と共に圧倒されるだろう。そして最後の歌謡の解説にいたるまで、そのままの迫力を維持しつづける本書は、何とも後進の者に

とって容易ならざる峠のごとく立ちはだかっている。  
（昭和四十八年九月、東京堂出版、A5判五〇六頁、九五〇〇円）

### 熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』

竹 盛 天 雄

熊坂敦子氏の『夏目漱石の研究』が上梓されたのは、昭和四十八年三月のことであった。わたくしが書評を依頼されてから荏苒として時をへているうちに、この書物の評価はゆるがぬものとなつて、すでに再版が出たと聞く。しかしまだ本書をめぐつての書評は出尽くしたとは言えぬらしい。新鮮さを身上とする書評新聞でさえも、再版に応じて批評を載せたくらいだから。わたくしが今机辺を清め、改めて本書にむかうゆえんである。

熊坂氏はこれまで漱石研究をになつて来た有力な研究者のひとつである。氏自身、「漱石一途に歩んで来た歳月」（あとがき）という言いまわしをつかつているが、まさしく本書は、そういう研究者の年輪がうかがわれる仕上がりぶりを見せている。全体は三部構成をもち、「漱石文学の世界」「作家漱石の基盤」「文獻」という大きい分け方にもとづいて、三十余編の文章が収められている。熊坂氏の研究者、または漱石文学の読み手としての面貌が、それぞれの部門において現われているのが、本書の特質のひとつ

と言つてよい。だが、わたくしは第三部の「作家漱石の基盤」の名の下に集められている各編をもっとも尊重したく思う。たしかに漱石は多くの人々に愛読され、論じられているにちがいない。

漱石文献は他の近代作家のそれを圧倒しているであらう。重量たる論考と感想文によって自然に出来上がった膜や壁は、かえって漱石とその文学の本地を遙かに遠ざけているかのようだ。漱石の本体そのものがどこかへ疎外されかねない。むしろ読み手は、作家と作品の上にしたりがおをしてのさばっている膜や壁を突き破り、ぶち壊すという作業から始めねばならない、という奇妙なことになりかかっている。むしろ、これは単に漱石における状況だけではない。文学研究上の共通のアポリアとすべきであらう。しかし、比較の上で言えば、漱石研究は市にぎわうだけに、一層、痛切にそのことが感じられると言うことだ。したがって、既成の論が自明のことのようにして通過して来た「基盤」を、もういちど新たに洗いなおし再検討することが、今日、もっとも必要にしかつ有効な作業になりはじめた。熊坂氏の『朝日文芸欄』について、資料『朝日文芸欄』細目』等は、その典型をなす仕事だと言つてよい。こういう基底部からもういちど見直して見ようとする姿勢は、当然、資料検討のこころみを生み出し、「漱石と愚石」におけるような見定めが行なわれることになった。熊坂氏の周到な考証をへても、愚石が漱石の変名であったかどうかについては、なお、疑いを存しないわけではない。が、こういう追尋は、漱石そのものを浮き彫りにする貴重な試論と言わねばなるまい。『漱石拾遺』の方に入れている『三愚集』について「書

簡二通と断片」というような、比較的短い文章にも、熊坂氏のはば同様な視線が読み取られる。

わたくしは今「視線」の語をつかったが、それは正確な言いかたではないのかも知れない。「視線」の底部を支えている好みというようなものを、ふと、そんなふうと呼んでみたのだった。熊坂氏には、自筆物好きとでも呼ぶべき、ある種の好み、が潜んでいるように察せられる。それはまた、すこし変容して俳句への深い関心とも微妙な地点でむすびついているようにも考えられる。こんな風に見るのは、わたくしの僻見であらうか。「漱石の俳句」「漱石と子規」「漱石と虚子」などの俳句を視点にすえた文章からは、この大冊のがつちりとした三部構成のはざまを縫って、ひとすじの涼やかな氣流がながれて来る。おそらく俳句への関心は、著者の文学開眼への何かと結びついているに相違ない。幾分とり澄ました堂々たる行文にも、わたくしはそんな素顔を覗き見る。

わたくしがこんなところに低徊しているのはほかでもない。この『夏目漱石の研究』と名づけられた浩瀚な書物が、モノトーンでなく深い陰翳を湛えていることを言いたいからであった。しかし、それは一方から言えば、漱石の世界そのものが要求する深さであり、多面性でもあらう。「宗教観」をめぐるては禅その他について考え、「漱石とベルグソン」では同時代のベルグソン移入文献などを検討しながら、この作家の実存にかかわってくる問題を解明しようところみている。だが、「漱石の思想」の章の下に置かれているこの二論文では、「思想」への照射は二面的にす

ぎると言わざるをえない。「漱石の方法」の章に編入されている「則天去私」論、「漱石とその時代」の章の『「高等遊民」の成立』という一文などもまた、ここへ一括されるべきであった、とわたしは考える。対象のもつ多面性に歩調を合わせることも、原理的集約的な掘り下げを通じて、多面を把むべきではなかったか、とも思われる。しかし、時代の「高等遊民」概念と漱石文学におけるそれとの異同の指摘、「則天去私」への切り込みなどは、やはり、全篇を通じて、もっとも重んじられねばならぬものである。前者には文学史家としての成熟がうかがわれ、後者には純粹でねばつこい情熱がその追尋ぶりに躍如としている。特に「則天去私」論は、熊坂氏の漱石研究家としての最初期を飾る記念的な意味合いを持つ。それだけに改訂の跡をたどるとき、ある種の感慨なきをえない。が、「則天去私」解釈は、今後においても漱石論の眼をなすであろうし、倦むことを知らぬ篤学のこの著者は、なお己が研究の原点ともいふべきこの難問にむかって、不斷に自己を問いつづけるに相違ない。わたくしは深甚の興味をもって、氏の掘り下げを見つめたいと思う。

わたくしは、あるいは著者の意向にさからって、第二部から読んで来た。それは、作家の「基盤」への追尋と考察とが、現下の漱石研究の中心にすえられるべきであると考えからだ。

第一部「漱石文学の世界」は、第二部にくらべると、比較的執筆時期が短くまとまっているのも特徴だ。『硝子戸の中』の構図が昭和三十八年三月の日付でもっとも古い、が、昭和四十四年あたりから四、五年の間に精力的に書き進められたものばかり

である。一概には言えないが、おりから一般的に作品論が目立ちはじめ、漱石関係でもすぐれた作品分析、読みにもとづく論考が現われはじめた時期が、それらの論の背景にあることは無視できない。今からふりかえって見ると、越智治雄、桶谷秀昭、遠藤祐、平岡敏夫、内田道雄氏等々のそれぞれの論考も、熊坂氏の仕事とはほとんど同時に進行しており、一つのしあわせな、しかし白熱した研究気運が醸成されていたということもできるだろう。したがって、この季節に発想され執筆された漱石論には、ある共通の達成があると言えるように思う。瀬沼茂樹氏が本書の書評で述べた印象、「正直にいう、私の気のつかなかった新しい角度から新たな照明が加えられ」（「解釈と鑑賞」昭48・6）云々の語は、瀬沼・伊藤整・荒正人氏らの刺激を受けつつ出発したもう一つ下の世代の手になる秀抜な漱石論一般にあてはまるものと言えなくはない。たしかにこの辺に一つの曲角があったのだ。それらの論は、むしろそれぞれ固有の達成と陰翳につつまれているにしても、個々の作品の読みの徹底、存在論的な視点からの分析、文学史的把握の修正、もしくは深化という面が、漱石作品を舞台にして具体化されているようだ。そのような同時代的な交響の中で進められた熊坂氏の作品論の特色は、分析的叙述が精到であり、つねに作の全体的イメージを浮き上がらせることに努めている点にある。バランスを失った部分への埋没もなく、思いつきに走る僻論の傾きもない。わたくしが特に教えられたのは、「虞美人草」「三四郎」「彼岸過迄」などの女性形象の把握の深さである。「三四郎」における雲の動きの分析や「明暗」における天の意味につ

いての指摘など、著者の用意はつねに細心周密であると言つてよい。しかし、わたくし個人の好尚と問題意識から言へば、これだけの大著でありながら總体的に漱石初期作品に触れるところがすくなく、したがってそれらの評価が不鮮明であると言ふ不満もなはない。わたくしはさきに熊坂氏における俳句への関心について触れたが、氏のそのような好み、が、「吾輩は猫である」の読みにおいて、ほとんどまったく言つてよいほど発動しないのは、不思議なくらいである。ここで分析されている「猫」は、深刻に過ぎて軽みに乏しい。およそ、この作品ほど笑いやおかしみをめぐる言語論的形態論的アプローチを要求している作品はないと言つても過言ではあるまい。だが、これは特に熊坂氏個人の責任に帰するものでなく、わたくしをも含めて氏と同世代の研究者たちの漱石研究の課題の一つは、このような欠落を埋めてゆくところにあるだろう。

引き合いに出した瀬沼氏は、その『夏目漱石』の新装版（東大出版UP選書）を出すにあたって、自分の漱石論が今日なお有効であるという確信を序文で述べており、わたくしはそれを興味深く読んだことがある。作家と作品と時代との関連とを的確に見据えて統一的な漱石論を築き上げているという点で、氏の自恃の念はまさしく客観性をもっていることを知らねばならない。さきに触れた一つの曲り角を示す新研究といえども、統一的全体的漱石論という面から見れば、やはり部分的であるという憾みがある。熊坂氏の三部構成の著書が、さすがに長い研究歴を裏づける多面性をそなえ、論文の一つ一つは十分に磨き上げられ、美事な達成

を示している点については、すでに述べたごとくである。「文献」編もいろいろな面で工夫がほどこされており、利用度はきわめて高い。しかしなお、統一的全体的漱石論としての透徹と結晶とは、氏の今後への期待であることを言わざるをえないのではない。か。龍を得て蜀を望むものとしての譏りを蒙るかも知れない。だが、これは研究史上においてある一つの世代の引き受けるべき課題なのである。完結を期待したい。氏自身、すでに新たな出版を始められていることは言うまでもないのであるが（あとがき）……。多年にわたつて漱石研究の恩恵を受けているもののひとりとして、おくれ走せながら感銘の一端をしるさせていただいた。

（桜楓社 A5 六六四頁 定価—初版へ昭48・3・5）四八〇〇円、再版へ昭49・2・20）六八〇〇円）

### 浅見 淵著 『史伝 早稲田文学』

川、副 国 基

この書の成立事情については、著者の浅見氏に親近してきた保昌正夫氏が巻末に敬慕をこめて行きとどいた解説を附している。第七次「早稲田文学」が昭和四十四年二月創刊されたときから四十八年四月まで誌上に発表されてきたもので、あと四回で完結のところ、中絶したものという。遂次発表されていた文章に病床にあった浅見氏自身がさらに手入れをしていたものを保昌氏が